第52回　コイ

誰もが知っているコイ、とても身近な淡水魚です。釣魚として、食用として日本人に好まれてきました。観賞用として改良された錦鯉は新潟県を中心に盛んに養殖されており、海外にも多く輸出され、日本のひとつの文化として世界から評価されています。

そんなコイですが、これまでコイと一括りにされていたものが実はふたつの種から成り、もともと日本にいた種は琵琶湖にだけその純粋な系統が残っていて、ほとんどのコイは大陸から持ち込まれた別の種であり、在来の種との交雑も進み、日本古来のコイは絶滅が危惧される状況である、ということが最近分かってきました。

日本古来の種は野鯉と呼ばれていて、池にいるコイとは違いがあるということは、昔から釣り人などから指摘されていたそうです。シーボルトも琵琶湖にいた野鯉が他のコイとは違うということに気がついていたようですが、のちの研究者からは、この見解は重要視されず最近まで見過ごされてきました。日本に2種のコイがいるということは、遺伝子解析によりこの20年ほどの間に分かってきたことです（馬渕、2017）。野鯉が新種として記載される可能性もあるようです。

同時に、コイが生態系へ深刻な影響を与えていることも分かってきました。コイは本来とても貪食な魚で、水底に住んでいる生きものを何でも食べてしまいます。体も大きくなるので、もともとコイがいなかった水系に放たれると、そこにもともといた水生生物を食べ尽くしてしまうといったことも起こります。里山で調査をしていると、1匹のコイ以外に水生昆虫がほとんど見られないため池など、ブラックバスの放流と同じような状況が見られます。もっと大きな水系でも問題を起こしているようで、北アメリカでは爆発的に数を増やすなどの問題となっており、国際自然保護連合では、コイを世界の侵略的外来種ワースト100のうちの1種に数えています。

さて、河北潟にもコイが生息していますが、どのように考えたら良いでしょうか。まず、外部的な形態から見て、今の河北潟でよくみられるコイは、ほぼ外来種で間違いないようです。河北潟は水面が広く、水鳥など小さなコイの捕食者もいるので、コイによる深刻な問題は指摘されていません。ただし、影響については調査されていないので、注意深く見守る必要があります。また、一方で、コイが産卵に使う浅瀬のヨシ帯が衰退傾向にあるので、その動向も見ていく必要があります。河北潟に野鯉がいないのかということも気になるところです。河北潟の昔の写真を見ると、明らかに今より細身のコイが写っています。（文：高橋　久）